

1 山口県における AFPY の歩み

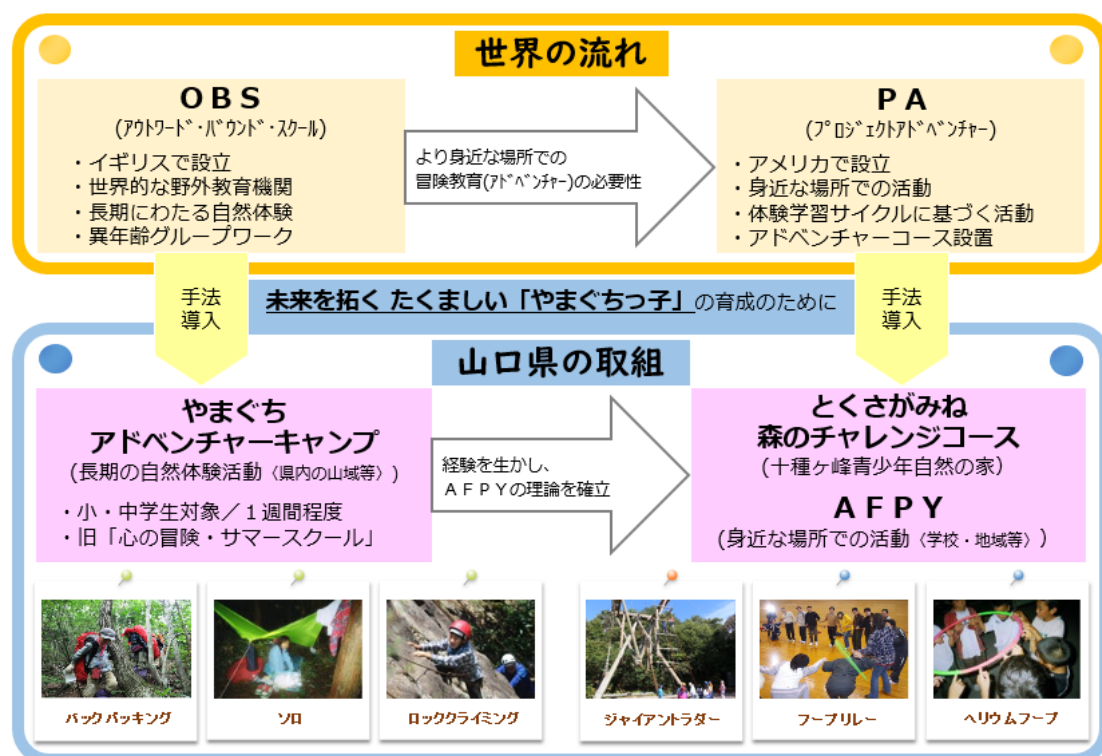
山口県では、世界的な野外教育機関である Outward Bound School (OBS※1) の教育手法を導入し、平成5年度から県内の小・中・高校生を対象とした青少年自然体験活動推進事業「心の冒険・サマースクール」等の長期自然体験活動を実施してきました。令和5年度からは、「やまぐちアドベンチャーキャンプ」に名称を変更し、小・中学生を対象とした1週間程度のプログラムを実施しています。これまでに、延べ2,800人を超える子どもたちが参加し、「自己肯定感」「他者との信頼関係の構築」「自然や人に対する感謝の念の育成」等に学びを得てきました。

一方、アメリカでは、大自然を舞台とした OBS プログラムにより得られる教育効果を生かし、学校や地域等における冒険教育プログラムを提供する教育機関 Project Adventure (PA) ができました。

山口県においては、「やまぐちアドベンチャーキャンプ」の指導者が野外での冒険活動の経験を生かし、学校や地域でも使える PA の手法を取り入れ、山口県の子どもの生きる力を育む一つの手立てとして Adventure Friendship Program in Yamaguchi (AFPY: アフピー) を確立し、活動してきました。この手法は、現在、学校教育や社会教育の様々な場に広がり、子どもたちの人間関係を育むために活用されています。

こうした「OBS 手法」「PA 手法」を取り入れ、学校教育・社会教育の両面における活動を展開していることが山口県の特色でもあります。

※1：世界的な野外教育機関。自然体験活動とカウンセリングを組み合わせた野外教育活動を展開。



2 AFPY の理論

AFPY の定義

AFPY とは、「他者と関わり合う活動を通して、個人の成長を図り、豊かな人間関係を築くための考え方と行動の在り方を学び合う、山口県独自の体験学習法」です。

ここでいう「他者と関わり合う活動」とは、ゲーム的要素の強い人間関係を深める活動（アクティビティ）だけでなく、各教科、道徳、特別活動、部活動、地域の行事等あらゆる活動を想定することができます。

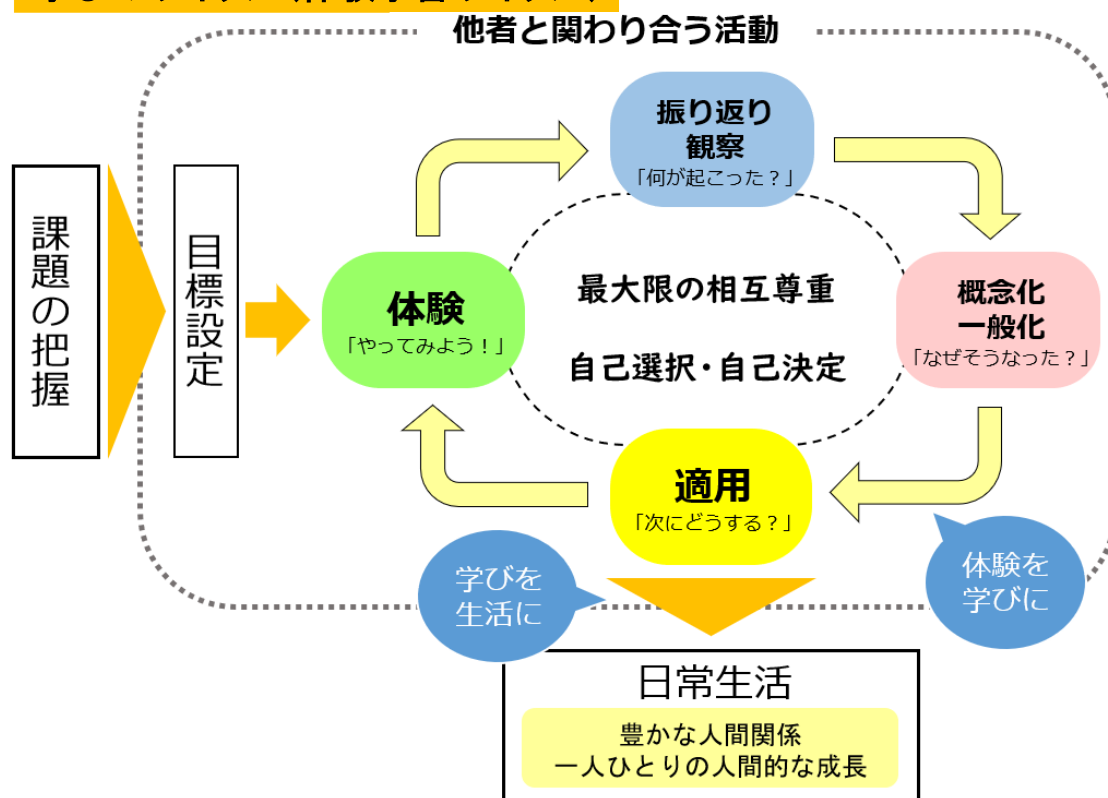
AFPY のねらい

AFPY は、人間関係を深める活動（アクティビティ）等を生かして、よりよい集団・学級・学校づくりに取り組む中で、一人ひとりの人間的な成長を促します。これは、様々な活動を通して、「個人の成長」を促し、「自己肯定感の向上」や「自信の回復」などをめざすと同時に、「集団の成長（集団づくり・仲間づくり）」を促し、集団におけるよりよい人間関係づくりをめざすものです。

AFPY の基本的な流れ

AFPY では、様々な活動の中で「学びのサイクル（体験学習サイクル）」の考え方を取り入れ、体験を学びにつなげることにより、豊かな人間関係を育みます。つまり体験（活動）のやりっ放しでなく、活動中の子どもたちの言動からグループで起こっている状況をつかみ、適切にフィードバックし、活動中や活動後の振り返りに生かすことが大切になります。そして、得られた学びを日常生活につなげることが求められます。

学びのサイクル(体験学習サイクル)



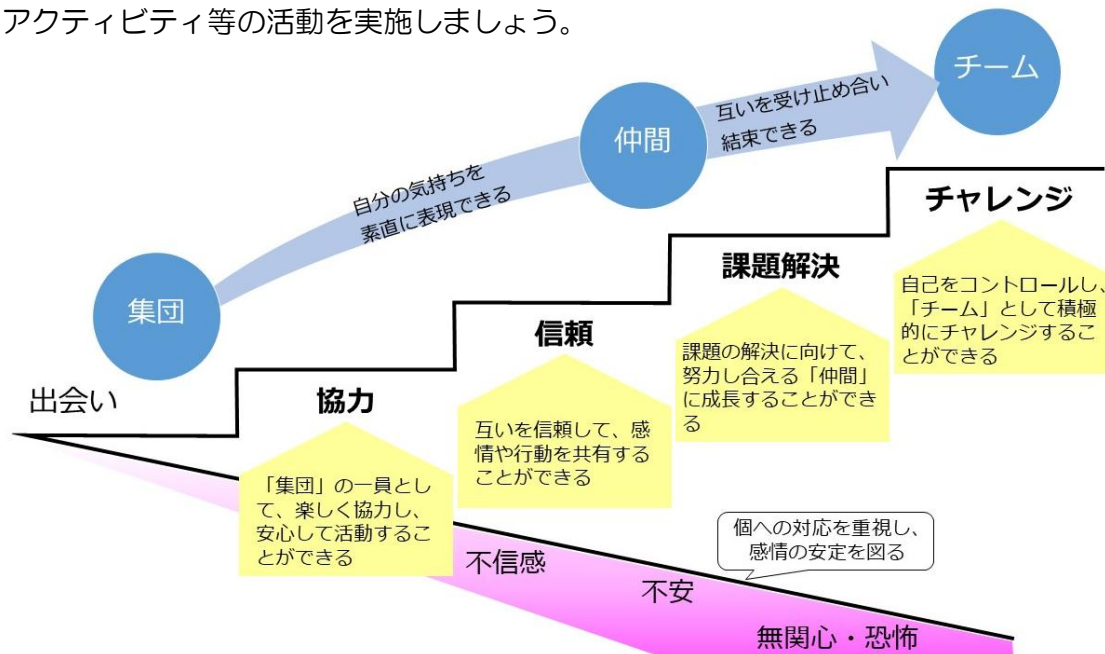
3 実施にあたって

「学びのサイクル（体験学習サイクル）」を大切にしましょう

AFPYでは、目標設定から始まり、「学びのサイクル（体験学習サイクル）」に沿って活動を展開していくことが大切です（「AFPYの基本的な流れ」参照）。体験のやりっ放しではなく、子どもが活動で得た学びに気づき、その学びを生活に生かすことができるようにしましょう。

集団の発達過程を意識しましょう

初めて出会った同士のメンバーに課題解決的な活動を与えても、なかなかうまくいきません。集団の発達過程を考え、心と体をほぐす活動であるアイスブレイクから入るなどの工夫が必要です。アクティビティ等の活動に子どもを合わせるのではなく、子どもに合ったアクティビティ等の活動を実施しましょう。



活動の過程を大切にしましょう

アクティビティを実施するとき陥りやすいのが、「課題が解決できたか、できなかったか」という活動の結果に目を向けてしまうことです。アクティビティを実施することが目的ではなく、アクティビティの中で個人やグループに起こっているできごとに目を向け、その様子を活動中や活動後の振り返りに生かしたいものです。課題が解決できなかった場合にも、活動の中には学びがあります。成功体験、達成感を味わわせることが全てではありません。

また、アクティビティは目的によって次のように分類できます。しかし、一つのアクティビティでも、展開の仕方によって違った目的の活動にすることができます。

知り合うための活動：	互いに知り合い、楽しみながら親しい関係を築く
緊張をほぐすための活動：	苦手、恥ずかしいと感じても、失敗を恐れずに積極的に行動するようになる
意思疎通を図るための活動：	互いに意見や感情を的確に伝え合えるようになる
信頼関係を確認する活動：	仲間といることで自分は守られていると実感する

課題解決のための活動： 効果的にコミュニケーションをとって協力し合う経験をする

指導者が自ら体験した上で取り組みましょう

アクティビティとなりうる活動が紹介されている書籍や資料はたくさんあります。それらを参考に組み合わせてみることも可能です。

しかし、それぞれの活動の実施について細かい注意事項や多くのバリエーションがあります。また、授業と同じように、目標や内容が同じでも、指導者の個性によって微妙に流れや効果が変化します。

指導者が実際に体験し、自分と集団の変容を感じることで、実際に指導するときに、どのような場面で、どのような支援をするか、その支援の仕方、タイミングを学ぶことができます。

様々な研修機会に参加し、ぜひ体験してみてください。「百聞は一体験に如かず！」です。

継続して取り組みましょう

AFPY は、一時的な対処法や解決策を求める魔法の活動ではありません。継続して活動していく中で、子どもたち自身が個人と集団の変容や成長を感じることが大切です。特別な取組としてではなく、発達支持的生徒指導の手段の一つとして、実践を積み重ねていくとよいでしょう。一つのアクティビティを何度も繰り返し行うことでも、十分な効果を得ることができます。

子どもたちの気付きを大切にしましょう

「一方的に教え込まれる」とことと「自分で気付くこと」。どちらの学びが生きた力として働くでしょうか。

AFPY では、指導者は、子どもたちに教え込むのではなく、暗喩（メタファー）が含まれるアクティビティ等の活動を使って、子どもたち自身の気付きを引き出していくことが大切です。「仲良くしようね」と指導者が伝えるのではなく、「仲良くしたいな」「仲良くすることは気持ちの良いことだ」と子どもたちが自ら気付くような仕掛けが求められます。

また、発言を強制することは控えましょう。沈黙の間、子どもたちの頭の中では、様々な思いがめぐっています。指導者は、その思いを引き出すきっかけとなるような、活動中の子どもたちの言動を把握しておく必要があります。

「仕掛けて待つ」。この姿勢を指導者はもちたいものです。

「振り返り」を大切にしましょう

「振り返り」というと「ここが良くなかった」というマイナスの部分にスポットを当てることが多くありませんか？

AFPY での「振り返り」は、子どもの動き・言葉のやりとり・仲間との関わり等の過程に目を向けて、「今グループで何が起きているのか」「日常において同じことが起きているか」等に、子どもたち自身が気付くように導くことが大切です。「振り返り」は、話し合いだけでなく、絵にしたり、モデルを作ったり、図形や写真に表したりと様々な表現方法があります。

目的なく体験のみで終わることや指導者の「説話」だけで振り返りの活動が終わることは避けたいですが、「振り返り」を活動ごとに必ずする必要はありません。集団の状況に応じて、学びが子どもの言葉から出てきそうな適切なタイミングで行いましょう。